



# 追憶

三浦礼未

## 芸・・・挽歌

---

ひとり  
カクリヨのとばりにかくれ

ひとつの芸は  
そのナガレをとめる

芸のワザは

つながり  
つむがれ

そのひとであったから  
かがやいていた  
芸のタマシイは

そのいっしゅんに  
ときをとめる

みたくても  
あいたくても  
その  
えがおとともに

うしなわれる

芸はケイショウされる

なんて  
うそだ

芸のワザと  
タマシイ

タマシイは  
そのひとがうしなわれるとともに  
エイエンにうしなわれる

わずかな  
キオクと  
うごくえの  
キロクをのこして

さようなら

あいすべきひと

あなたの  
こえ  
かお  
すがた

エイエンに

とどめて

# 消防車がいく

---

遠くでサイレン

うちの犬が遠吠えを始める

カンカンカンカン

鳴り響く

鐘の音

多くのサイレンが

行き過ぎた後

向こうの方から聞こえてくる

消防第10分団の

サイレン

がんばれ

いそげ

走り出す

真っ赤な

ちっこい

消防車

地元の

にいちゃん

おっちゃん

一生懸命

職場を後に

走る

走る

自分たちががんばらねば

誰かががんばる

気概を胸に

現場到着は

少し遅れるかもしれない

消防署の消防車が

もう

消しているかもしれない

でも

町内を一番知っているのは

自分たち

後始末も

自分たち

そして

また

職場へ帰る

日々の生活へ

分団の建物の前を

通るとき

時々見かける

ホースを干している姿

消防車を洗っている姿

地元の

にいちゃん

おっちゃんたち

では

今日もまた

無事であることに

感謝しつつ

一番身近な  
ヒーローたちに

乾杯！

## ふゆのせいざ

---

たましひ

ほし

きらら

輝く

冬の夜空

青く

澄んだ

暗い夜空

つき

ひとつ

さえたひかり

おとし

ただ

自分の影だけが

ついてくる

いてつく

たいき

すんでいく

こころ

いろいろなモノが

カケラとなって

碎け散れ

さししめせ

星座たち

あるいていく

おかのうえ

オリオンは  
かがやく

行けるだろうか  
その先まで  
このさびしい  
夜の道を

いきを  
しろく  
はきながら



きのうからあした

---

きのうはもうないんだよ

あしたはまだどこにもないけど  
さしあたって  
来るにちがいない

だから  
ちょっと期待してみよう

きのうすれちがって  
離れていった人と  
いつかどこかで  
またすれちがえるかもしれない

きのうは挨拶できなかったけど  
今度は  
にっこりわらって

こんにちは

といおう

きのうばかり見ていると  
離れていった背中しか見えない  
あしたにはひよっとしたら  
にこにこ笑った顔が見えるかも

そしたら  
こんどこそ

こんにちは  
といおう

こんにちは

ごきげんいかがですか

そうしたら

.....

また

道が始まるかもしれない

ずっと

ずっと

どこまでもつづく

## 追憶

---

芝居がはねた誰もいない小屋  
道具がすべて取り払われ  
空っぽになった舞台

照明も消え

少し前まで  
ざわめいていた  
客席の体温も失せ

しずかに  
沈黙のとばりが下りる

舞台の上で  
繰り広げられていた芝居  
役者は今  
しずかに  
役の仮面を脱いで

ねむりにつく

語られる  
記憶だけを残して

帰り道で  
帰り着いた家の  
温かな居間で  
待っていた家族たちに  
語られる

舞台の記憶

おもしろかった  
たのしかった  
しあわせだった

なけた  
かわいそうだった  
ころろがいたんだ

でも  
すばらしかったよ

もう  
千秋楽を迎えた芝居が  
明日は  
舞台にかかることはないけれど

記憶だけは  
ずっと

カーテンコール

最後に拍手を送ろう  
幸せな時をくれた

役者たちに

誰もいない舞台  
その中央  
スポットライトのぬくもりを残した  
床の上に

一輪の  
小さな花の  
残り香

## モザイク

---

不意に訪れた  
破滅の時  
大地の底が裂け  
海は世界を飲み込んだ  
炎と水と  
押し流され  
粉々になった  
いのちのかけら

モザイク  
モザイカ  
ひとつひとつ  
つなぎ合わせて  
もういちど花を咲かそう  
モザイク  
モザイカ  
今は暗い夜の海に  
一人ぼっち  
孤独を抱えて  
だけど  
きっと太陽はまた微笑む

永遠に続くような  
沈黙の夜  
地の底がきしみ  
海は黒い怒涛となった  
炎と水と  
押し流され  
粉々になった  
いのちのかけら

モザイク  
モザイカ  
ひとつひとつ  
ぼくたちはまた  
もういちど花を描こう

モザイク

モザイカ

かけらになったところ集め

新しい花を

みんなで咲かそう

だって

ほら太陽はまた輝く

## あとがき

---

再開第三詩集です。ちょっとこのところ、いろいろと好きな役者さんや関わった方が鬼籍に入られることが相次ぎまして、その方々へ手向ける詩が、この詩集のメインを占めることになってしまいました。

本当に好きな、あるいはまだまだこれから活躍できる方が亡くなるのはつらいです。特に、若い方が事故で亡くなるのは。

『芸...挽歌』は狂言師の野村万之介さんへの手向けの詩です。本当に味のあるいい役者さんでした。

『追憶』は不慮の事故で亡くなったまだ若い役者さんへの思いを書いたものですが、その後ろには昨年から次々と亡くなられた名優の方々への気持ちも含めています。人生最後の千秋楽のステージ。しかし、どの方も、特にまだこれからであった若い方の死は本当につらいものがあります。不思議なことにやっぱり元気な笑顔や初主役を一生懸命つとめていた姿ばかりが浮かんできます。

そして、私にご存じのとおり、普段は現代詩しか書きません。歌われることを対象とした歌詞は今まで2, 3回しか書いたことがありません。でも、今回の東北地方太平洋沖地震に関して、つたないですが、応援歌のつもりで『モザイク』を書かせていただきました。私には文章を書くことしかできませんので。

モザイクは砕けたタイルのかけらを組み合わせで絵を描く技法です。この地震で粉々に砕け散ってしまった人の命、家族、生活、思い、そのほか様々なもの。長く暗い心細い夜を越えて、もう一度かけらとなったところや人々のかかわりをつなぎ合わせ、一つの絵を描くことができたらという願いを込めて作りました。

このようなものを書いたところでどれほどの力になれるかはわかりませんが、夜を越えればもう一度朝は必ずやってきます。おこがましく、失礼かもとは思いつつ、ここに上梓させていただきます。よろしく願いいたします。

2011. 3. 12 (土) 23:00 三浦礼未